

王仁昫切韻に見える

原本系玉篇の反切

——又音反切を中心に——

古屋 昭 弘

六朝・隋唐の音韻資料として陸法言『切韻』(隋仁壽元年序、六〇一年)の反切の果たす役割は大きい。反切用字の觀察と音韻史的考察を結びつけた最近の研究⁽¹⁾によって、反切上字は聲母を示すだけでなく、多くの場合、歸字の直拗を反映し、時には歸字の韻母の細かい特徴をも反映すること、韻母・聲調を示すだけで良いはずの反切下字は自らの聲母にさまざまな制約を受けること、などが明らかにされている。これは恐らく反切上・下字を融合しやすくするための、反切作製者の意識的な配慮あるいは無意識裡の偏向と思われ、音價推定そ

の他の大きな手がかりとなるものである。ただし陸氏切韻原本は夙に佚し、以上の研究は主に廣韻以前の唯一の完本、宋跋本『王仁昫刊謬補缺切韻』(王三²)の小韻反切三六〇〇餘をもとに進められている。それは王氏切韻(七〇六年頃)が時代的にも廣韻(一〇〇八年)に較べ遙かに陸氏切韻に近く、小韻反切も陸氏のものをはぼそのまま繼承したのであることが切韻殘卷との比較により豫想できるからである。

しかし王氏切韻の價値は陸氏切韻の代用という點にのみあるわけではない。「陸氏の誤りを正し、不足を補う」という「刊謬補缺」ほどの程度のものであったのか、その過程で王氏はいかなる資料を用いたのか、底本は陸氏切韻であるのか、など考えるべきことは多い。その一つの糸口となるであろうものが本稿で扱うところの所謂「又音反切」である。王氏切韻の殘卷としては敦煌寫本・ペリオ二〇一一(王二³)があり、平上去入にわたり比較的よく残っている。この王一と王三を對校することによって、小韻反切以外に、一字多讀の字音を指し示す又音反切が三千近くも得られる。王仁昫切韻の成立過程を考える上で、これら多數の又音反切は新たな光を投げかけるものと思われる。

二

一般に、陸法言の嚴選を経たと推定される小韻反切に比して、又音反切は一見雜駁に見えるためかこれまで敬遠されがちであつた。ここで切韻系韻書の又音反切がどのように扱われてきたかについて少しふりかえてみたい。

まず、廣韻の又音反切への注目は清末の陳澧『切韻考』が反切系連法の變例としてそれを用いたのに始まると思われ。系連法により、反切上字から聲類を、下字から韻類を歸納することに主觀の入る餘地は殆どないが、問題は、同類と豫想されながら系連してこない場合である。聲類において「多[・]得[・]何切」「得[・]多[・]則切」と「當[・]都[・]郎切」「都[・]當[・]孤切」の如く、それぞれが互用されて系連しない時、陳氏は一字兩讀の又音反切を使った。平聲「東」韻「凍[・]德[・]紅切」の又音「又都[・]貢切」は去聲「送」韻「凍[・]多[・]貢切」を指し示す、故に「多」と「都」は同聲類、というたぐいである。反切系連法の客觀的適用による51の聲類を、又音反切を用いて40聲類と減らした陳澧『切韻考』には、しかし批判が殺到する。もしも徹底的に又音を使って系連するならば、聲類の數は40にとどまらず減少してしまふからである。實際に試みた人の數

王仁昉切韻に見える原本系玉篇の反切（古屋）

字によれば、

張煊「求進歩齋音論」——33類

羅常培「切韻探蹟」——28類

陸志韋「證廣韻五十一聲類」——24類

の如くであり、人によつて數に出入があることから、又音反切による變例の客觀的運用のむづかしさがわかる。かくて批判の目は、又音反切に向けられることとなる。陸志韋上掲論文は次のように言っている。

廣韻又切……其參差糅雜之處、與正反之體例嚴整適相對比。甚或同一韻中、前後相隔數行、而正反切已不同類、且或不互註又切。（十二頁）

周祖謨「陳氏切韻考辨誤」（漢語言韻論文集、一九五七、九〇頁、もと二九四〇）も「廣韻之又音至爲凌雜、不能與小韻之反語齊觀」という。

なるほど、切韻系韻書の集大成である廣韻の又音反切は雜駁かも知れない。しかし、陸志韋論文が先の引用のあとで「又切所保存之聲類未必與正切同一系統、且每一又切各自有其來歷、亦不必自成系統」というように、それぞれの又音反切には切韻の增訂過程における來歴があるはずであり、それが一つ一つ明らかになりさえすれば、小韻反切の缺を補う貴

重な資料となり得るに違いない。陳澧以後、又音反切を聲類の混同や韻類の相通などの資料とする試みは幾つかなされてはいるが、その來歴が明白でない限り、汎時間的な、相對的に價値の低い資料にとどまらざるを得ないのではなからうか。

三

それでは、王仁昫切韻の三千近い又音反切の場合はどうであらうか。江南道衢州信安縣（現在の浙江省衢縣）の縣尉である王仁昫が切韻に對する「刊謬補缺」を行うに至ったいきさつは、自序に詳しい。それによると、江南東道巡察黜陟大使の平嗣先という人が衢州へ採訪に來た際（七〇六年と考證されている）、訓註を缺き字數も少い陸法言切韻を増訂するよう王仁昫に勧めた、とあり、王氏の用いた底本が陸氏切韻であったことを窺わせる。王氏以前の百年間、陸氏切韻に増訂を加えた人がかなりいたであらうことは切韻諸殘卷によつて知られるが、序文ものこり増補の體例も明らかなのは、長孫訥言箋註切韻（儀鳳二年、六七七年）のみである。長孫氏切韻の殘卷と王氏切韻の該當部分とを較べてみると、長孫氏特有の説文による案語が王氏切韻には一つも見られず、新加字も一致しない。また、切三など初期切韻殘卷の場合は大多數の字

や訓が王氏切韻に含まれるものの、王氏の用いた底本とみならずには独自の増補とみられるものがやや多い。一方、陸氏切韻の殘卷といわれる寫本の殆どすべての字や訓は、王氏切韻に含まれてしまう。そこで、王仁昫は陸氏切韻に對して独自の増訂を加えたのではないか、つまり、王氏切韻は陸氏切韻本來の部分と王氏所増の部分からなるのではないか、と推測できそうである。⁽⁵⁾ 兩者を識別することができれば、三千近い又音反切の資料的價値は高まる。廣韻の場合とは異なり、陸氏の又音反切と、王氏所増の又音反切、という收録時期の明らかな二層に分け得ることになるからである。兩者の識別には、自序にいう底本部分墨書・新加部分朱寫という區別を寫本の王三・王一に望めない以上、やはり、王氏切韻以前の成立と推定される切韻諸殘卷との比較に頼らざるを得ない。王氏切韻と諸殘卷に共通する字や訓註は陸氏本來のもの、王氏切韻に見え殘卷の該當箇所に見えないものは王氏による増加、とみなすことが一應は許されるであらう。兩者不一致の部分、比較すべき殘卷のない部分は、不明とするほかない。

例：上聲・董韻・力董反

權〔切三 袴又直隴反

〔王三 袴又直隴反亦作祠又來公反

〔共通部分を陸氏本来、傍點部分を王氏所増、とみなす〕
 このようにして全體にわたる比較を試みた結果は以下の如くである。

○陸法言本来と推定されるもの

又音反切 五三七

訓中の語への音註 四八

○王仁昫所増と推定されるもの

又音反切 一八九二

訓中の語への音註 一九

○確認すべき殘卷なく不明

又音反切 四一一

訓中の語への音註⁽⁷⁾ 一六

以下、訓中の語への音註も廣義の又音反切に含めて考察することとする。

四

陸氏本来と推定される五八五例の又音反切のうち、二二二例は指し示す相手の小韻反切と用字を等しくする。

例：平聲・登韻・步崩反（切三、王三、王一）

棚 又薄庚反↓平聲・庚韻・薄庚反

王仁昫切韻に見える原本系玉篇の反切（古屋）

それらを除く三二三例の中には、次のような、切韻系韻書の小韻反切に使用されたことのない上・下字が散見される。

上字：己既琴言旭玄益易逐指浪弟亭風怖毛天

下字：龍陂枝葵泥齊陳彈丹蓮家香抽攸瞻蟻比混誕受走晷
 事付布泰潰窳懣授督僕學駁鬱切削折

しかし、切韻の讀音體系を亂すような反切が殆どないことは、陸氏自身による收録と推定されるからには當然とはいえ、やはり注目してよいと思われる。

一方、王仁昫所増と推定される又音反切一九一例の場合はどうであろうか。まず、小韻反切の用字と全同となるものは六三九例、それらを除いた一二二例のうちには切韻系の小韻反切に未使用の上・下字がめだつて多い。

上字：工飢鉅乾午彥熙肝詡紅互奚甌猗惟唯俞庚矣禹社據
 陳壯齒戶恃十仁寧禿達租念錯祚財會祀碑破社妨紡旁彭
 裨麻

下字：龍池斯猗質咨葵雖幾於除閭珠娛泥梯蜀餒臺仁神芥
 園蕃孫桓肝丹般燕躄妍蟬沿條姚燒胥科他她家堪貧函姜
 香唐衡聲亭攸牛丘投恬繩緘蟻藥筆紫枳子旅祖鼓底混混
 嬾蓋於齋佼狡保禍仰帶部棟翅惴異氣付喻賴悌麗齮潰混
 慨恠俊愠頰遜免爛翰館慢寡銜饋淡尚詠訂斛屋郁陸督屬

學卓佚秩率兀退鐵節姪折孽的席惜謫匪躍陟

これだけ多數のしかも筆畫の多い字に満ちた上・下字があるということは、王仁昫が用字上の大幅な統一を圖っていないこと、そして恐らく他資料からそのまま取ってきたものが多いためであろうことを意味する。

切韻の韻分類・聲母體系を亂すかに見える反切もすくなくない。ここでは聲類に關するものを擧げるとどめておきたい。

▽「徐」類と「昨疾」類の交流（邪母と從母）

- ① 槽 又似多反（尤凶）¹⁰ ↓冬・在宗反
 - ② 銑 又似奚反（齊齋） ↓齊・徂嵇反
 - ③ 譙 又似焦反（笑瞧） ↓宵・昨焦反
 - ④ 糟 又祀牛反（豪槽） ↓尤・字秋反
 - ⑤ 祖 又似与反（麻嗟） ↓語・慈呂反
 - ⑥ 祚 又徐故反（鐸昨） ↓暮・昨故反
- 〔似祀は徐類、在徂慈字は昨疾類〕
- ▽「于」類と「以」類の交流（喻母三等と四等）
- ⑦ 孺 又尤尔反（卦書） ↓旨・以水反
 - ⑧ 繻 又尤恚反（卦書）¹¹ ↓眞・以睡反
 - ⑨ 盍 又余救反（有有） ↓有・尤救反

⑩ 盍 又余久反（有有） ↓有・云久反

〔尤云は于類、余は以類〕

▽「于」類と「胡」類の交流（喻母三等と匣母）

⑪ 孺 又尤卦反（旨唯） ↓卦・胡卦反

〔尤は于類、戸は胡類〕

▽「作子」類と「側」類の交流（精母と照母二等）

⑫ 焦 又子角反（藥爵） ↓覺・側角反

▽「昨疾」類と「士」類の交流（從母と牀母二等）

⑬ 爰 又徂嫁反（隊睥） ↓禡・鋤駕反

〔徂は昨疾類、鋤は士類〕

▽「初」類と「倉七」類の交流（穿母二等と清母）

⑭ 輒 又又垢反（尤鄒） ↓厚・倉垢反

〔又は初類〕

▽「昌」類と「倉七」類の交流（穿母三等と清母）

⑮ 咎 又充甘反（怙眊） ↓談・倉甘反

〔充は昌類〕

韻分類に關していえば、「支・脂・之」韻、「霽・祭」韻、「先・仙」韻、「蕭・宵」韻、「添・鹽」韻などの混同らしき例がある。

これらをどうみるかについては、二通りの解釋が可能であ

る。一つは、王仁昫自身の讀音が顯現したとみる解釋。龍字純「例外反切的研究」⁽¹²⁾が、①～⑥などの例を挙げながら王仁昫の會稽方言が顔を出したものと云っているのは、この解釋に近い。いま一つは、王仁昫が切韻とは讀音體系の異なる資料に基いたとみる解釋。前者は王仁昫による反切作製を前提としなければならず、先に挙げた切韻系小韻反切未使用の上・下字の多彩さを考え合わせるならば、後者の方がはるかに自然である。

果して現存の諸資料中、王仁昫所増の又音反切と似たような特徴を見せるものはないであろうか。試みに、反切用字の既に調査されている六朝・隋唐の諸資料をいくつか調べてみた。その中で、前掲の切韻系小韻反切未使用の上・下字と最も近いと思われたのが、周祖謨「萬象名義中之原本玉篇音系」(問學集)に整理された『篆隸萬象名義』の反切上・下字、つまり萬象名義が基いたところの梁・顧野王『玉篇』の上・下字である。上字では「工甌矣寧租破紡旁彭」を除く三九字、下字では「池斯雖梯蜀芬般箝堪香亭祖蓋於佻齡免翰篡郁佚牽」⁽¹⁴⁾を除く一五字が萬象名義でも使われている。今のところこれ以上に近い資料はなく、萬象名義が、顧野王玉篇全卷の抄録とはいえ、その反切をすべて傳えているとは限らない

王仁昫切韻に見える原本系玉篇の反切(古屋)

(後述)ことを考えれば、かなり高い一致だと思われる。

更に、切韻の讀音體系に合わない例と同様の音韻的特質は、江南讀書音を表すとされる玉篇、經典釋文陸德明音、曹憲博雅音などの反切に類似例を求め得ることが多い。特に原本系玉篇の反切は前掲①～⑮の例外的反切のうち②⑨⑩⑬を除いた諸例と、用字に至るまでの一致をみせる。

- ① 槽 似多反(萬象名義⁽¹⁵⁾・二・82ウ)
- ② 譙 似焦反(古鈔本⁽¹⁶⁾・九・29)
- ③ 槽 祀牛反(萬象名義・三・84ウ)
- ④ 祖 似与反(萬象名義・六・154オ)
- ⑤ 秤 徐故反(萬象名義・四・80オ)
- ⑥ 嬾 尤・尤卦二反(萬象名義・一・76ウ)
- ⑦ 纒 尤・胡卦二反(古鈔本・二十七・319)
- ⑧ 盃 cf. 余救九二切(大廣益會玉篇⁽¹⁷⁾・中50)
- ⑨ 嬾 尤・尤卦二反(Ⅱ⑦)
- ⑩ 焦 子藥子角二反(新撰字鏡⁽¹⁸⁾・55・3)
- ⑪ 榧 又垢側溝二反(新撰字鏡・406・4)
- ⑫ 管 充甘反(萬象名義・四・62ウ)

以上のような特殊な例における一致を手がかりとして、王仁昫は切韻増訂作業における所據資料のひとつとして玉篇を

用いたのではないかと推測することができる。この推定を確實にするためには、やはり王仁昫所増の又音反切のすべてを玉篇と比較する必要がある。

五

玉篇側の資料として、我國に傳わる古鈔本玉篇と高山寺藏『篆隸萬象名義』を用いる。近年、同じく古鈔本といっても必ずしも質的に均一でないこと、萬象名義にしても空海撰の第一一四帖と、後人の續編にかかる第五・六帖とでは、所據玉篇に新舊の差があることなどが明らかにされている。⁽¹⁹⁾ いずれにせよ、兩者の反切が、宋代の大幅な刪訂を経た『大廣益會玉篇』(大中祥符六年、一〇二三年)に較べ、顧野王原本により近い姿を保っているであろうことは疑いない。

王仁昫所増の又音反切のうち、小韻反切と用字の異なる一二七二例と、玉篇側の二資料とを比較した結果は次の如くである。

①古鈔本玉篇の反切と全同 七四例

例：

歛 {王三 又呼禹反(虞計) ↓ 況羽反
玉篇 呼娛呼禹二反(九・161)}

頰 {王三 又先酒反(麋頰) ↓ 息有反
玉篇 先酒反(二十七・330)}

②萬象名義の反切と全同 四〇九例

(うち①と共通、三二例)

嗣 {王三 又大孔反(送洞) ↓ 徒摠反
名義 大孔反(一・93)}

芋 {王三 又禿靈反(迴莛) ↓ 他丁反
名義 禿靈反(四・35才)}

合計四五一の一致であり、古鈔本玉篇が顧野王玉篇全三十卷の八分の一から六分の一程度しか残っていないこと、名義が必ずしも玉篇の反切すべてを収録しているとは限らないことを考えれば、決して低い一致とはいえない。のこりの八二一例のうち、玉篇の二資料に比較すべき反切があり、なおかつ一致しない例は一三〇例ほどに過ぎず、あとは比較すべき反切なく不明のものである。その中に、既に佚した原本系玉篇反切が含まれている可能性は高いと思われる。事實、そのうちの二〇一例は、玉篇に基いた部分の明らかにされつつある『新撰字鏡』(僧昌住、昌泰年間の撰、八九八―九〇一年)などの佚文資料と一致する。例：

价 {王三 又公齡反(黠憂) ↓ 怪・古拜反
字鏡 公八公齡二反(572・4)}

敲 王三 又尺・欒反(弼垂) ↓ 獮・昌菴反
 字鏡 初委尺・欒・丁果三反(640・6)

更に一九六例は大廣益會玉篇と一致する(うち新撰字鏡と共通、四六)。訓註における大幅な刪訂を蒙ったとはいえ、大廣益會玉篇に顧野王の舊を伝える反切がのこっていても不思議はない。その識別のためには却って王仁昫の反切が新たな手がかりとなりうる可能性がある。たとえば次の例では、萬象名義に見えないもう一つの反切が顧野王玉篇にも存在していた確率が高くなるのではなからうか。

扞 王三 又於・娛反(模枯) ↓ 虞・憶俱反
 又口孤反(虞紆) ↓ 模・苦胡反
 大廣益會玉篇 於・娛口孤二切(上60ウ8)
 萬象名義 口孤反(二・40ウ)

管 王三 又唯・并反(青熒) ↓ 清・余傾反
 又黃亭反(清營) ↓ 青・胡丁反
 大廣益會玉篇 唯・并胡亭二切(上43オ9)
 萬象名義 胡亭反(一・97)

以上から見て、王仁昫が相當多數の玉篇反切を又音反切として切韻に増補したことはほぼ確實である。

王仁昫切韻に見える原本系玉篇の反切(古屋)

六

韻書において、複数の音を持つ字は複数の場所に置かれるのが通例である。多くの場合、王仁昫はそれぞれの場所にお互いを指し示す又音反切を加えている。つまり一字二音の例では、一つの字に對する二つの又音反切を集めることができ、一つの字に對する二つの又音反切を集めることができるわけである。反切は傳承性が強く、系統の異なる韻書・字書などの間で、同じ字の反切が雙方で上・下字とも全同となることはむしろ稀である。まして二反切がついた字の場合、二資料が二組の反切上・下字をすべて等しくする確率は極めて低い。逆に言うと、二資料間に反切用字上の甚しい一致が見られたならば、繼承・被繼承の關係を考えざるを得ない(21)といふことになる。

そこで更に一字二反切の一致の例を多く挙げることにより(玉篇側資料内に存在する二反切との一致例のうち、二三反切とも小韻反切と用字の異なるものすべて)、玉篇反切と王仁昫の又音反切との繼承關係を確かめてみたいと思う。

○古鈔本玉篇との一致

慮 王三 又子孔反(東恣) ↓ 董・作孔反
 又且公反(董摠) ↓ 東・倉紅反
 玉篇 子孔且公二反(二十二・191)

礪		謙		杯		磨		飲		險		警	
玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三
又口冰反(蒸礪) ↓混·苦本反	又口冰反(混闔) ↓蒸·綺兢反	又理兼反(添鬚) ↓琢·力冉反	又理兼反(添斂) ↓添·勒兼反	又孚不反(尤觥) ↓有·芳酒反	又孚丘反(有恒) ↓尤·匹尤反	又紅談反(覃龜) ↓談·胡甘反	又公舍反(談酣) ↓覃·古南反	又呼恬反(覃哈) ↓添·許兼反	又呼男反(添韃) ↓覃·火舍反	又式注反(虞鬢) ↓遇·傷遇反	又式于反(遇戊) ↓虞·式朱反	又乃之反(青寧) ?之·尺之反	又乃經反(之蚩) ↓青·奴丁反
口本口冰二反(二十二·222)		理兼理染二反(十九·263)		孚不孚丘二反(二十七·309)		公合紅談二反(九·105)		呼括呼男二反(九·164)		式注式于二反(二十二·239)		乃經乃之二反(九·52)	

𪗇		徑		嬰		語		飲		湏		誦	
名義	王三	名義	王三	名義	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三	玉篇	王三
又口彫口的反(五·65ウ)	又口彫反(錫燉) ↓蕭·苦聊反	又牛耕反(耕姪) ↓先·五賢反	又牛耕反(先姪) ↓耕·五莖反	又聚惟反(旨揆)	又衢癸反(支睡) ↓旨·葵癸反	又乾仰反(養勞) ↓勤·徒紺反	又大紺反(養勞) ↓勤·徒紺反	又其表反(厚歐)	又於垢反(小惠) ↓厚·烏口反	又奴管反(輪便) ↓早·乃管反	又奴館反(早餽) ↓輪·乃亂反	又徒布反(姥普)	又澤古反(暮怖) ↓姥·滂古反
		牛耕牛燕二反(一·62ウ)		衢癸聚惟二反(一·73ウ)		乾仰大紺二反(九·49)		其表於垢二反(九·75)		奴管奴館二反(十九·270)		布徒澤古二反(九·7)	

○萬象名義との一致

③新加小韻

小韻首字——小韻反切・訓・(又音反切)
 小韻所屬字——訓・(又音反切)

①の結果、王仁昫切韻には訓を缺く字がなくなつたものと思われる。②③による新加字は全體で推定五六〇〇字にも及び、異體字に關する註が急増するのも特徴的である。又音反切と玉篇反切との廣範圍にわたる一致を考へる時、王仁昫がそのような増補の過程でも玉篇に據つてゐる可能性は高いといえよう。切韻内部での音節の増加を意味する新加小韻の問題とともに、全面的な検討を將來に期したい。

〔註〕

(1) 陸志韋「古反切是怎样構造的」(中國語文一九六三年第五期)の研究手法や、平山久雄氏、上田正氏らによって展開されてゐる「類相關」の考へ方などを指す。

(2) 完本王韻、全王なども略稱される。一九四七年、故宮博物院により影印出版。抄寫年代について唐蘭跋文は太和年間(八二七—八三六)とし、周祖謨「王仁昫切韻著作年代釋疑」(問學集所收)では唐五代間の寫本と言う。本稿では龍宇純『唐寫本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』(中文大學、一九六八)の原本謄寫部分を使い、廣文書局縮印の影印本を参照。なお

小韻反切は李榮『切韻音系』(科學出版社、一九五六)に整理されてゐる。

(3) 姜亮夫『瀛涯敦煌韻輯』(上海出版公司、一九五五、鼎文書局再刊、一九七二)による。上田正『切韻殘卷諸本補正』(東洋文化研究所、一九七三)の校訂にはすべて従う。ほかに王二と略稱される内府本刊謬補缺切韻があるが、内容に疑點が多いため今回は使わない。

(4) 「求進步齋音論」『聲韻學論文集』(木鐸出版社、一九七六)所收による。「切韻探蹟」中山大學語言研究所週刊3・25・26・27、一九二八。「證廣韻五十一聲類」燕京學報25、一九三九。

(5) これは總字數の検討からも充分裏付けられる。王氏切韻には卷首ごとに底本の字數と王氏所増の字數に關する詳しい註がある。惜しいことに王三は卷二の註を缺くため確定不可能であるが、今姑く李永富『切韻輯』が陸氏原本として復原した卷二の二二七〇字によれば、底本の標出字の總數は一一六三六字となり、封氏聞見記に傳へる陸氏切韻の字數一一一五八八字(長孫氏所増の六〇〇字を含むとみれば一一一五五八字)や、式古堂書畫彙考所載の孫愼唐韻序に見る唐韻所據切韻の字數一一五〇〇字に接近する。底本の訓註が非常に少かつたことも卷首の註から知られる。なお同様の見解は次の論文にも見える。蔣經邦「敦煌本王仁昫刊謬補缺切韻跋」國學季刊4・3、一九三四。王聯曾・Un Dictionnaire

Phonologique Des "ang", Young Pao 45, 1957, など。

- (6) 『切韻殘卷諸本補正』の同定と分類に従い、次の諸殘卷を使う。

陸法言切韻——「切一」など四種

初期切韻——「切三」など十一種

長孫訥言切韻——「切二」など五種

このほか蔣斧本唐韻を王氏所増部分の識別に際してのみ用いた。

- (7) ほかに直音形式の又音が王氏所増部分に44、不明部分に3あり、古今音・俗音が王氏所増部分に9（反切7、直音2）、不明部分に2（直音）ある。

- (8) 唯一の例外は「炎、又餘念反」（鹽韻・炎、念は添韻去聲）が鹽韻去聲の以贍反を指すことである。「𪔑、又士漹反（厚韻）↓徂鉤反」と「葭、又蘇寡反（寄鎖）↓廣韻・沙瓦切」は小韻反切にも同様の例があり、齒上音・齒頭音の交流とはみなしがたい。「𪔑、又居由反」（尤鳩、由は尤韻）は幽韻の穆・居蚪反を指すか。「𪔑、又女鬱反」（薛𪔑）は不可解。

- (9) 又音反切の指し示す小韻に當該字を増字したのも王仁昉であることが確認される例のすべて。底本既存の字を指し示したものの中にも、錢・又似連反、聚・又似喻反、樓・又爲乖反、鶯・又于戈反、褶・又時入反、杼・又時落反のような例外反切がみられる。特にことわらない限り、以下の舉例は王三による。王一との異同や切韻諸殘卷の有無を一覽し得る對

王仁昉切韻に見える原本系玉篇の反切（古屋）

照表を作製中である。

- (10) 括弧の中は又音反切の所在を示す。たとえば「尤囚」とは尤韻の「囚」の小韻のこと。矢印は指し示す小韻反切。

- (11) 「尔」は支韻上聲、「水」は脂韻上聲であり、支・脂韻の交流をも示している。

- (12) 中央研究院歷史語言研究所集刊36、一九六五、三五七頁。

- (13) 坂井健一『魏晉南北朝字音研究』（汲古書院、昭和50年）所收の六朝諸家の反切資料、董忠司『曹憲博雅音之研究』、周法高『玄應反切字表』（崇基書店、一九六八）など。

- (14) このうち、新撰字鏡（↓註18）の玉篇反切には「芬般香祖𪔑」が見える。

- (15) 篆隸萬象名義は高山寺古辭書資料第一（東大出版會、一九七七）による。

- (16) 古鈔本玉篇は東方文化叢書による（巻9、18、19、22、27）。足りない部分は古逸叢書による。檢索用に『玉篇零卷』（大通書局、一九七二）の頁數を付す。なお巻9は早大圖書館所藏。

- (17) 澤存堂本による。

- (18) 天治本（京大國語學國文學研究室編『新撰字鏡』、臨川書店、昭和48年）による。貞苴伊德「新撰字鏡の解剖」（訓點語と訓點資料12、13、14、昭和34〜35年）により、原本系玉篇に基く部分が明らかとなる。檢索は註15の書の宮澤俊雅編「掲出字一覽表」による。

(19) 貞刈伊徳「玉篇と篆隸萬象名義について」國語學31、一九五七。上田正「玉篇殘卷論考」神戸女學院大學論集17—1、一九七〇、など。古鈔本では卷18・19が古く、卷9・22・27が新しいとされる。上田氏は「新しい」玉篇を、反切用字が唐代に下るほど新しくないとして「野王より僅か七・八年後」の梁・蕭愷による改訂本と推定、上元元年(六七四)の孫強増加玉篇である可能性を否定された。王仁昉が玉篇反切を用いたことが認められるとしても、どの玉篇を使ったかが問題となる所以である。

(20) その中には次のように小韻反切と較べて玉篇反切の用字に近い例も多い。

又扶蕃反↓附衰反(古鈔本・扶藩反)

又蒲池反↓符齠反(名義・蒲馳反)

又大堪反↓徒南反(名義・大甚反)

最後の例はむしろ萬象名義の「甚」を「堪」と校訂する一つの材料となりうる。

(21) 慶谷壽信「敦煌出土の音韻資料(中)——首楞嚴經音の文學的考察——」人文學報91、一九七三、七頁、參照。

(一九七九・十)